

サマリー

## 日本の 2030 年木質バイオマス発電導入見込量と その燃料供給可能性評価

新エネルギーグループ 研究員 木村 謙仁

〃 研究主幹 二宮 康司

2015 年 7 月に経済産業省より発表された「長期エネルギー需給見通し」では日本の 2030 年度のエネルギーミックスを提示しており、バイオマス発電のなかでは「一般木材・農作物残さ」を燃料として用いる設備の導入見込量が非常に大きくなっている。そこで本稿では、この導入見込量が実現した際に必要となる木質バイオマス燃料の量を推計し、その数値が持つインパクトを明らかにし、その結果をもとに、日本が選択し得るバイオマスエネルギー政策の方針について簡単な考察を試みる。2030 年度に必要となる木質バイオマス燃料（年間 256～355 PJ 相当）は、2015 年の燃料用途以外を含む国産材総供給量（215 PJ）を大きく上回り、輸入材に依存することになる可能性が非常に高い。また、その必要量は世界市場での木質バイオマス燃料の取引量（2015 年：521 PJ、2030 年推計：1,216 PJ）と比較しても大きな割合を占めることになるため、安定的な輸入量を確保するための方策を現段階から実行することが必要になると考えられる。

お問い合わせ : [report@tky.ieej.or.jp](mailto:report@tky.ieej.or.jp)